

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 『[漢語/文章]熟字早引』の<国語>をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): kangojisho, Jukuji Hayabiki, kokugo, kango, slang 作成者: 今野, 真二, KONNO, Shinji メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002170">https://doi.org/10.15084/00002170</a>

# 『[漢語／文章] 熟字早引』の〈国語〉をめぐって

今野 真二

(清泉女子大学)

## キーワード

漢語辞書、熟字早引、国語、漢語、俗語

## 要旨

明治9(1876)年刊『[漢語／文章] 熟字早引』([漢語／文章]は角書きであることを示している)は〈国語〉(=語訳／意味)から〈漢語〉を求めるために作られた小型漢語辞書である。明治初期に作られた多くの辞書が、『新令字解』、『漢語字類』、『増補新令字解』の影響下にあることが指摘されているが、体裁、幾つかの項目の記述から推して、当該辞書はおそらくはそうではない。この〈国語〉には漢語も含まれており、〈国語〉として配置された漢語は見出し項目となっている漢語よりも当期理解されやすかったことが予想され、当期の漢語の層を観察するために有効である。また〈国語〉が説明的である場合、対応する見出し項目に置かれた〈漢語〉に対応する和語が安定して存在していなかったことが予想され、当該辞書の〈国語〉を注視することによって、明治期の日本語のあり方を観察する手がかりを得ることができる興味深い資料であることを指摘した。

## 1. はじめに

東京の原田道義の手によって編まれ、〈東京江藤喜兵衛〉を〈出版人〉<sup>1</sup>として、明治9(1876)年4月に『[漢語／文章] 熟字早引』([漢語／文章]は角書きであることを示している。以下本

ツメ	タメカメ	タメ	ニメハメ	イメ	ヌエ
孟浪	希絶	目撃	晝視	垂憐	亮察
ヤクダク	キセツ	トドカキ	サウシ	スイレン	リカサツ
新奇	珍稀	睡覚	着眼	恩顧	各個
ヨウキ	チキン	スイカン	ミツガシ	コノコ	カクコ
珍詫	異聞	顯著	決眸	愉悦	明晰
チキン	イブン	ケンナウ	ケンボウ	エツモウ	ハイタク
					女メ
					指點
					ソテン
					オビ
					豪奪
					ガウダツ
					リリス
					搘搦
					エウダツ
					テヌ

図1 『[漢語／文章] 熟字早引』84丁裏 (メ部冒頭)

書とよぶことがある)なる(『新令字解』・『増補新令字解』のように1面12行, 2段の体裁ではなく)1面11行, 3段の体裁をした小型の辞書が刊行されている。<sup>2</sup>

本書の〈凡例〉には次のような条があり得る。以下本稿においては、当該文献の右振仮名は上部に、左振仮名は(左××)の形式で示すこととする。ここでは、後の行論に必要と思われる振仮名のみを示し、それ以外を省き、漢字字体は現代通行のものに換え、合字も調整の上に掲げる。なお「/」は改行、「」は改頁の位置を示す。〈近時文明ノ聖教ニ化シ、文態モ隨ッテ一新シ、人ノ漢語ヲ称ヘザル者ナク、書ニ熟字ヲ記サマルハナシ、斯ニ於テ漢語ノ字書類、世ニノ公行ル者少シトセズ、何ノレモ其語其字ヲ照合セ画ノニ由テ引用フ、是其書記セルノ字ヲ讀ンニ、最モ有用利便ノトス然レトモ常ニ称フル、國ニ<sup>クニコトバ</sup>辭ノ義理ニ合ヘル、熟語ヲノ求ルノ書アルコトナシ、故ニ日ノ用語譚ノ際、或ハ手臍(左テガミ)ヲノ記スニ至テ、吾言フ所思フノ所ノ、漢語ヲ知テ用フルコト能ハズ、止コトヲ得ズ旧習ニ從ガヒ、俗語ニ漢語ヲ交ヘテ言ヒ、ノ熟字ト俗辭ヲ雜ヘテ書ス、ノ故ニ今此書ヲ述テ、國語ノノ上ヨリ漢語ヲ引ケ、日用ノ捷引ノ一小冊トス〉ここではっきりと述べられているように、本書は〈国語〉から〈漢語〉を引くための辞書として編まれている。また〈凡例〉からすればはなしことばとしての漢語は〈漢語〉、かきことばとしての漢語は(おそらく語をこえた単位も視野に入れるという含みをもち、あるいは実状に即したみかたとして)〈熟字〉と呼び分け、はなしことば内に〈俗語〉と〈漢語〉との別を、かきことば内に〈俗辞〉と〈熟字〉との別をみているか。本書題名もこれを併せてみれば、角書きにみられる〈漢語〉ははなしことばに関わって、〈文章〉はもちろんかきことばに関わってのこと、この両者にわたって(広義の)〈熟字〉をひくための辞書とみるべきであろう。それは〈国語〉から〈漢語〉をひくための辞書というみかたとほぼ<sup>3</sup>重なり合う。漢字列〈国語〉は〈凡例〉末尾にちかいところには〈國<sup>クニコトバ</sup>/語〉(5オ2~3行目)とある。

全体の構成としては、まず〈平セイ云トコロノコトバニ/アタルジユクジヲ出ス〉<sup>ダングヨモソ</sup>〈言語門〉が、全142丁中106丁の分量で置かれ、見出し項目(=〈漢語〉)は、〈国語〉の第2音節までのイロハ分けによって配列されている<sup>4</sup>。以下、〈テガミ又ハ平ゼイノアイサツ/ナドニツカフジコウノコトバ〉として〈時令門〉が108ウ8行目から113ウ9行目まで、〈人ノミニカ、リタルコトバ〉として〈人倫門〉が118ウ1行目まで、〈人ノワザニカ、リタルコトバ〉として〈人事門〉が134丁オ11行目(最終行)まで置かれ、134丁ウ1行目から138丁オ5行目まで、再びイロハ分けされた箇所となり、次に〈助語助字〉とあり、その内部はやはりイロハ分けされ、143丁ウの辞書最末尾に至る。134丁ウ1行目から最末尾までは、〈目次〉では〈附録〉とされている。

本稿では〈凡例〉で述べられている、〈国語〉から〈漢語〉を引くということを手がかりにして、本書の〈国語〉についてさまざまな方向から考えてみたい。

## 2. 本書の体制

本書の体制を、メ部(84丁ウ3行目~86丁オ1行目、32行の95項目中の91項目)を掲げることによって次に示す。また、以下の行論はここに掲げた項目を主に例にとっておこなう。後述する『漢語字類』にもみられる項目には項目番号の前に○を付した。

01明晰	(左セイ) メイハク明白	02詳明	メイサイ明細
03困惑	メイワク迷惑	04各個	メイメイ 名々
05確言	メイゴン名言	06先見	メイサツ明察
○07亮察	同 (=メイサツ) アキラカニミル		
○08瞬息	メバタキノマ		
○09觸目	メニフレル	10駐目	メニトマル
11悦目	メニホヤフ	12瞳目	メニカドタテル
○13垂憐	メヲカケル	14恩顧	同 (=メヲカケル)
15偷眼	(左トウ) メヲカスメル	16睞視	メヲミハル
17着眼	メヲツケル	18決眸	メヲトメル
19目撃	メヲトメル	20睡覺	メガサメル
21顯著	メダツ	22希絶	メヅラシ
23珍稀	同 (=メヅラシ)	24異聞	メヅラシキウハサ
25孟浪	メツタヤミクモ	26新奇	メヅラシクフシギ
27珍詫	メヅラシキハナシ (フはワとあるべきか)		
○28未曾有	同 (=メヅラシキハナシ) イマダカツテアラズ		
○29監察	メツケ	30糊塗	メツチヤ
○31漫滅	メツチヤクチヤ	32漫雜	メツタニ
33殄滅	メツバウ	34精密	メンミツ
35詳密	メンミツ		
○36巧逕	メンミツナレドモラチアカズ	37各々	メンメン 面々
○38赧顏	メンボクナシ		
39臭辱	メンボクヲウシナフ		
○40不測	メンヨウ		
41顯美	メンボクヲホドコス		
42煩勞	メンダウ		
43餘煩	同 (=メンダウ) ヨケイナセワ		
○44變色	メンシヨクヲカヘル	○45面陳	メンダン面談
○46面晤	同 (=メンダン) アフテカタル		
○47面稟	同 (=メンダン) アフテマフス		
48銜名	メウモン名聞	○49長上	メウヘ
50榮顯	メウリ名利	○51目下	メノマヘ
52情疎	メノアカヌ		
53上瞼疣	メノウヘノコブ	54不恕	メノアカヌ人
56沐浴	メグミヲカフムル	○57膏澤	メグミウルホヒ
○58苛察	メクジラ		

モクケン 61目眩	メクルメク	
チユウシ ○62注視	メクバセ	クハシクワイ 63環會
ウンセン 64運旋	メグリメグル	テンクワイ 65轉回
ヒフク 66庇覆	メグミ	メグラス
ハクアイ ○67博愛	同 (=メグミ) ヒロクアイスル	
シンキウ 68賑給	同 (=メグミ) ニギフシアタヘル (下線部ワとあるべきか)	
サンバ 69恩波	同 (=メグミ) メグミオヨボス	
フクツ 70不屈	メグヌ	ケンクツ 71倦屈
シリヤウ 72視量	メブンリヤウ	リウシヤウ 73隆祥
キヤウフク 74亨福	同 (=メデタシ) サイワイ	
セイシヤウ 75盛祥	同 (=サイワイ)	
シャウズイ 76祥瑞	メデタキシラセ	
チウモク ○77注目	メデシラス	アイジ 78愛慈
ヘウジュン 79標準	メアテ	メデイツクシム
モクテキ ○80目的	同 (=メアテ) メザス	
レイガン 82冷眼	メザマシキ	
リンゼン ○83凜然	メザマシキサマ	ヘキマイ ○84辟命
テキシユ 85的手	メザスアヒテ	テキバウ 86的望
カンシキ 87監識	メキヽ	エツケン ○88謁見
シウエツ 89執謁	同 (=メミエ)	トウヨウ ○90登庸
チヨウモ 91徵募	メシツレル	メサルヽ メザスネカヒ
チヨウセツ 92徵招	メショセル	メミエ
シレイ ○93使令	メシツカウ	94隸仕
ケイバン 95挈伴	メシツレル	メシツカヒ

今第21項目を例にとって〈凡例〉の表現にあてはめてみれば、〈メダツ〉が〈国語〉にあたり、〈顯著〉が見出し項目として置かれた〈漢語〉ということになる。以下そのように呼ぶことにする。〈漢語〉には振仮名が施されている。振仮名は〈漢語〉として置かれた漢字列の発音を表わしていることがほとんどと思われるが、第44・54項目のような場合もあり、単に発音、「よみ」とばかりは言えない。また第40項目のように漢字列〈不測〉に〈フシギ〉と振仮名が施されていることもあり、こうした例には特に留意したい。

〈国語〉に注目してみる。そこには、言語単位としてみれば語が（一つ）置かれていることが多いが、語よりも大きな単位である句など、松井（1990）の言う「文脈的語釈」にあたりそうなものが置かれることもある。これは〈凡例〉に記されている、〈日用語譚ノ際〉や〈手臍ヲ記ス〉際に、例えば和語「メダツ」（第21項目）にあたる〈漢語〉は何かを求める場合、「メンボクヲウシナフ」（第39項目）あるいは「メンボクヲホドコス」（第41項目）ということを表現する〈漢

語〉は何かを求める場合、というようにひろく言語生活の中で使用されることが想定されていたためであろうか<sup>5</sup>。

また〈国語〉として、単語が置かれている場合、語種に着目すれば、もちろんそれが和語であることが多いが、そこに漢語が置かれていることも少なからずある。したがって、本書における「国語」は、和語には限られていないことがわかる。しかし一方で、本書は〈国語〉から〈漢語〉を求めるための辞書であるのだから、〈国語〉の位置に置かれている漢語は見出し項目となっている〈漢語〉とは異なるものとみなされていと推される。このことがらについても次節でくわしく考えてみることにする。

### 3. 〈国語〉について

#### 3.1. 語をこえた言語単位である場合

これまで述べてきたように、〈凡例〉によれば本書は〈国語〉に相当する〈漢語〉を求めるための辞書ということになり、そこには〈国語〉から〈漢語〉という「順序」があることになる。しかし実際にこの辞書を使う際、そして単語単位ではない〈国語〉から〈漢語〉を求める場合、期待されるような働きが可能だろうか。まず、辞書使用者の想起した〈国語〉がこの辞書編纂者のそれと一致しなければ、「結果」はだせないことにならないか。例えば「政事ナドムゴキコト」(慶應4年6月刊『新令字解』カ部6ウ10行目・明治3年刊東条永胤編『増補新令字解』31ウ3行目)あるいは「テヒドヒ」(明治2年1月刊『漢語字類』艸ノ部89オ6行目)という〈国語〉を思い浮かべ、それにあたる〈漢語〉を求めようとして、本書セ部あるいはテ部を繙いても本書の「苛刻」(ム部48オ6行目)にゆきつくことはできない。本書で「苛刻」に対置している〈国語〉は「ムゴシ／イラヒドシ」<sup>6</sup>となっているのでこのム部にあたらなければならない。〈凡例〉が謳うかたちでの本書の使用がまったく不可能なわけではちろんないが、しかしそこにも少し留保をつけておくべきかもしれない。

また編纂ということからすれば、〈国語〉から求められたいわば「結果」である〈漢語〉、すなわち見出し項目となっている〈漢語〉が、やはり本書が成了した頃の日本語の中で（ある程度は）使用されているということは暗黙の前提でもあろうから、となれば編纂はむしろ使用の方向とは逆に、見出し項目となる〈漢語〉の選定からはじまっているとも考えられ、そうなれば実際の編纂は①見出し項目となる〈漢語〉を選ぶ②選んだ〈漢語〉に語釈をつける、という一般的な漢語辞書と同じ方向でなされた可能性がたかくはないだろうか。また〈国語〉から〈漢語〉を求めるという本書の「方向性」を体制上も徹底させるのであれば、見出し項目にはイロハ分けした〈国語〉を置くことも考えられるが、そのようにはなっていないことをどうみるか<sup>7</sup>。

次に一つの引き合いとして、前掲した88の見出し項目について、本書以前に刊行されている『漢語字類』にあたってみると29項目（33.0%）を見出すことができる。次にそれらの項目を並べて掲げてみる。

06	<sup>センケン</sup> 先見	メイサツ明察
	<sup>せんけん</sup> 先見	マヘカラミスク (漢13オ 3行目)
*07	<sup>リヤウサツ</sup> 亮察	同 (=メイサツ) アキラカニミル
	<sup>りやうさつ</sup> 亮察	ハツキリミワカル (漢73オ 2行目)
*08	<sup>シユンソク</sup> 瞬息	メバタキノマ
	<sup>しゅんそく</sup> 瞬息	マバタキノマ (漢68オ 1行目)
*09	<sup>ショクモク</sup> 觸目	メニフレル
	<sup>しょくもく</sup> 觸目	メニトマル (漢100オ 7行目)
*13	<sup>スイレン</sup> 垂憐	メヲカケル
	<sup>すいれん</sup> 垂憐	メヲカケル (漢23オ 7行目)
*28	<sup>ミゾウ</sup> 未曾有	同 (=メヅラシキハナシ) イマダカツテアラズ
	<sup>みぞう</sup> 未曾有	ムカシカラナヒ (漢49ウ 4行目)
29	<sup>カンサツ</sup> 監察	メツケ
	<sup>かんさつ</sup> 監察	メツケ (漢67オ 2行目)
*31	<sup>マンメツ</sup> 漫滅	メツチヤクチヤ
	<sup>まんめつ</sup> 漫滅	メチヤメチヤ (原態は繰り返し符号) ニナル (漢58オ 5行目)
*36	<sup>カウチ</sup> 巧遅	メンミツナレドモラチアカズ
	<sup>かうち</sup> 巧遅	メンミツデテマドル (漢32ウ 3行目)
*38	<sup>タンガン</sup> 赧顏	メンボクナシ
	<sup>だんがん</sup> 赧顏	カホヲアカクスル (漢110ウ 5行目)
40	<sup>フシギ</sup> 不測	メンヨウ
	<sup>ふそく</sup> 不測	フシギ (漢3ウ 2行目)
*44	<sup>イロヲヘンズ</sup> 變色	メンシヨクヲカヘル
	<sup>いろをへんざ</sup> 變色	カホイロヲカヘル (漢45ウ 7行目)
45	<sup>メンダン</sup> 面陳	メンダン面談
	<sup>めんちん</sup> 面陳	メノマヘデマウシノベル (漢132ウ 2行目)
46	<sup>メンゴ</sup> 面晤	同 (=メンダン) アフテカタル
	<sup>めんご</sup> 面晤	上ニ全シ (=メンダン) (漢132ウ 1行目)
47	<sup>メンリン</sup> 面稟	同 (=メンダン) アフテマフス
	<sup>めんりん</sup> 面稟	メンダン (漢132ウ 1行目)
49	<sup>チヤウシヤウ</sup> 長上	メウヘ
	<sup>ちやうしやう</sup> 長上	メウヘノモノ (漢124オ 4行目)
51	<sup>モクカ</sup> 目下	メノマヘ
	<sup>もくか</sup> 目下	上ニ全シ (=タヽイマ) (漢67オ 4行目)
57	<sup>カウタク</sup> 膏澤	メグミウルホヒ
	<sup>がうたく</sup> 膏澤	ゴオン (漢73ウ 3行目)

58苛察	メクジラ コマカニミワケル（漢89オ 6行目）
62注视	メクバセ メヲツケテミル（漢56ウ 2行目）
*67博愛	同（＝メグミ）ヒロクアイスル ヲホクノモノヲカワユガル（漢21オ 3行目）
*68賑給	同（＝メグミ）ニギフシアタヘル 上ニ全シ（＝ホドコシヲスル）（漢109ウ 4行目）
*77注目	メデシラス メヲツケル（漢56ウ 2行目）
80目的	同（＝メアテ）メザス メアテ（漢67オ 4行目）
*83凜然	メザマシキサマ ゾツトスル（漢16オ 1行目）
84辟命	メサルヽ オメシノオホセ（漢113ウ 7行目）
88謁見	メミエ メミヘ（漢105オ 5行目）
90登庸	メシイダス メシイダサレル（漢65ウ 5行目）
93使令	メシツカウ メシツカフ（漢9ウ 7行目）

まず本書の〈国語〉と『漢語字類』の語釈とを比べてみる。（かなづかいは措くとして）項目13, 29, 88, 93のように両者で完全に一致しているものもみられるが、かなり異なる<sup>8</sup>ものも少なからず含まれており、この面からすれば本書は『漢語字類』の影響下にはないと（ひとまずは）みることができる。ただし、前述したように、（このメ部でみれば）3割以上の項目が両書で重なっており、これをどのようにみるか。項目選定に関しては『漢語字類』が関わっていたという可能性も含めて慎重に検討していく必要があろう。

ところで本書において語よりも大きい単位が〈国語〉として置かれている、\*を付した項目は、『漢語字類』でも同様の語釈が置かれていることが多く、これらの語は、本書が成った頃、すなわち明治9年頃までではいまだ見出し項目として置かれた〈漢語〉に1対1で対応する（1語の）和語が定まっていなかったかと憶測される。一方例えれば項目36にみられる漢語「メンミツ」は〈漢語〉に対応する〈国語〉あるいは漢語を説明する箇所に使用されているのであって、見出し語に置かれた漢語との間には「差」があることが予想される。

さらにこれらの見出し項目に関して、高橋五郎『[和漢／雅俗] いろは辞典』初版（明治22年

刊)にあたってみると、「触目」「漫滅」「巧遅」「賑給」は同辞書に見出し語として採られておらず、残りの項目については、

りやうさつ [する] (他) 亮察, 諒察, あきらかにみわくる, さとりわくる  
しゅんそく (名) 瞬息, またたき  
すいれん 垂憐, あはれみをたれる  
みそう (形) 未曾有, いまだかつてあらざる, むかしよりなき  
たんがん 艶顔, 赤面, あかきかほ  
へんしょく 變色, いろをかへる。いろがかはる  
はくあい 博愛 (汎く人を愛すること)  
ちうもく [する] 注目, めをつくる  
りんぜん (形副) 凛然, ぞつとする。りりしき, いかめしき

とあって、「りやうさつ」「すいれん」「みそう」「へんしょく」「ちうもく」「りんぜん」に関しては、和語による〈釈義〉が語を単位としておらず説明的であり、かつ〈類語〉が和語、漢語いずれも置かれていないと覚しいこと、「はくあい」に関しては、〈釈義〉と〈類語〉による語釈という、この辞典の一般的な形式をとっていないこと、などからこれらの項目の漢語が当期の日本語の中においていまだこなれていないものであったことを予想させる。したがって、本書の〈国語〉がどのような言語単位としてそこに置かれているかについて注目することによって、対応する〈漢語〉に関しての何らかの知見が得られる可能性があることになる。

### 3.2. 語種からみた〈国語〉

〈国語〉の位置に何らかのかたちで漢語が置かれている場合には次の3つがある。

a群 漢語を含んだ、語よりも大きな言語単位が置かれている項目

11「メニホヤフ」(保養) 25「メツタヤミクモ」26「メヅラシクフシギ」36「メンミツナレドモラチアカズ」38「メンボクナシ」39「メンボクヲウシナフ」41「メンボクヲホドコス」  
43「ヨケイナセワ」44「メンシヨクヲカヘル」67「ヒロクアイスル」

b群 漢字列が添えられていない漢語が一語のみ置かれている項目

32「メツタニ」33「メッバウ」34・35「メンミツ」40「メンヨウ」42「メンダウ」72「メブンリヤウ」

c群 漢字列が添えられた漢語が置かれている項目

01「メイハク」02「メイサイ」03「メイワク」04「メイメイ」05「メイゴン」06「メイサツ」  
37「メンメン」45・46・47「メンダン」48「メウモン」50「メウリ」

c群のようなかたちを探る項目はもちろんメ部のみではなく、他の各部に存在する。ナ部であ

れば、01「シニシ ナイキ内意」03「ナイジ ナイヨウ内用」06「ナイヲフ ナイツウ内通」などとあり、漢字列を添えられた漢語がイロハ分けをされた各部の冒頭部分に比較的多くみられるという「傾向」が看取される。となれば、これは見出し項目として採られた〈漢語〉それそのものに関わることがらではなく、見出し項目の選定といった、本書の成り立ちと関わることがらである可能性もあり、ここでは便宜上 b 群と c 群とを分けてみたが、あるいはそこには（漢語ということがらに関わっての）「差」はない可能性もある。

〈国語〉の位置に置かれたこれらの漢語について検討を加えてみる。山田(1981：上巻333-336)は『漢語字類』を対象として「見出し漢語」の「語釈中に用いられた字音語」を抽出しているが、その字音語と a～c 群に掲げた漢語とには重なり合いがみられる。重なり合いのあるものすべてを次に掲げる。

娯目	メノホヨウ	(漢29ウ 5行目)
不測	フシギ	(漢3ウ 2行目)
機變	フシギ	(漢51ウ 7行目)
末議	ヨケイナギロン	(漢49ウ 5行目)
巧遅	メンミツデテマドル	(漢32ウ 3行目)

山田(1977：632)は「伝承されて来た漢語と、新出の漢語との総体を、質的に区別してとらへること」を標榜し、「漢語層別化」を試みる。そこではまず明治極初期に刊行された『新令字解』が採り上げられ、その「解説文中の漢語」が抄出されているが、前掲 a～c 群と重なり合いはみられない。本稿が『熟字早引』のメ部に限って扱っていること及び『新令字解』そのものの見出し項目が906と多くないことにもようが、その〈凡例〉に〈太政官日誌／行在所日誌及ビ周旋／家應酬ノ語中ニツキ／抄出ス〉とある同字解が掲げる漢語と、『熟字早引』の掲げる漢語とに「差」があったためとも考えられる。見出し項目に「差」があれば、それを説くことばにも「差」が生じることは充分に考えられる。重なり合いがあること、それがないこと、両面を考えていく必要がある。山田(1977)はさらに『[布令／必用] 新撰字引』(明治2年刊)を同様に採り上げているが、同字引は松井(1990：189)によって「『漢語字類』を承けて成立している」ことが指摘されており、これは（両者の細部には違いがあることもわかってはいるが）『漢語字類』との対照と重なる。

山田(1977)はさらに『漢語便覧』『大増補漢語解大全』『広益熟字典』の3種の「漢語辞書解説文中に見える漢語の一覧」を示すが、そこにはこれら3種の漢語辞書の書誌的情報が示されていない。湯浅忠良編輯の『広益熟字典』には「画引部」(明治7年8月刻成)と「仮名引部」(明治8年10月刻成／同12月版権免許)の2種がある。今後者を通覧してみると、a～c 群の漢語と重なり合う「解説文中に見える漢語」として次のようなものを見出すことができる。

威靈	フシギナイコウ	(5オ 6行目上)	佳興	ヨキホヨウ	(53ウ 9行目下)
餘贊	ヨケイナタカラ	(70オ 1行目下)			
靈妙	フシギ	(81ウ 9行目下)	靈怪	フシギ	(同11行目上)
靈奇	フシギ	(82オ 2行目上)	浪擊	メツタウチ	(90ウ 6行目下)

フソク 不測	フシギ (116ウ 7行目下)	ヨイ 喰意	コヽロノホヨウ (127オ 2行目上)
ゴモク 娛目	メノホヨウ (127オ 3行目上)	コウナ 巧遅	メンミツデテマドル (127ウ11行目上)
アイサイ 愛才	サイシヲアイスル (141ウ11行目下)	キイ 奇異	フシギ (同下)
キコウ 奇倖	フシギノサイワイ (155ウ 3行目上)	キブツ 奇物	フシギナモノ (同下)
キシツ 奇質	フシギノウマレ (同 4行目上)	キクン 奇勲	フシギナテガラ (同 7行目下)
キコウ 奇功	フシギナテガラ (同 5行目上)	キダン 奇男	フシギナオトコ (同下)
キコウ 奇巧	フシギナクフウ (同 9行目上)	キグウ 奇遇	フシギナデアヒ (同12行目上)
キメウ 奇妙	フシギ (同11行目上)		
キサイ 奇才	フシギナサイキ (156オ 1行目上)	ジヤウクハン 冗官	ヨケイナヤク (171ウ 4行目上)
キヘン 機変	フシギ (159ウ 2行目下)	シンキ 神機	フシギナテガラ (同10行目下)
ジンカン 盡歎	ホヨウヲシツクス (193ウ 1行目下)	シンゴク 神功	フシギナテガラ (194オ 4行目下)
シンイ 神異	フシギ (193ウ12行目上)	シンハイ 神兵	フシギニハタラクヘイシ (同 6行目上)
シンザク 神策	フシギナテダテ (同 5行目上)	ゼイゲン 贅言	ヨケイノコトバ (227ウ 4行目上)
センサイ 仙才	フシギナサイキ (217オ 4行目下)	ゼイレイ 性靈	ウマレツキノフシギノコト (218オ12行目下)
ゼイロン 贅論	ヨケイノギロン (同下)		

村山(2003)は、「掲出語を『漢語字類』に求めた」(松井 1990:193)ことが指摘されている『新撰字類』(明治 3年刊)の改編に近い、「語義(日常語)から漢語を求める」(村山 2003)『掌中漢語早引』の「語義に用いられた漢語が口語化していた平易な漢語であること」(同:261)は予想できると述べた上で、郵便報知新聞の第1～第30号(明治5年6月～11月)と『西国立志編』第1～第3編の「本文の左に付された振り仮名にみえる漢語」(同前)との対照を試みている。a～c群中の漢語で、『掌中漢語早引』の「語義に用いられた漢語」と重なるのは25・32にみられる「メッタ(ニ)」、34・35・36と3項目にみられる「メンミツ」、38・39・41にみられる「メンボク」、45・46・47にみられる「メンダン」であり、いずれもa～c群内で繰り返し使用された漢語である。これら4語は『和英語林集成』第3版に、いずれも見出し語として見出されるが、就中「メッタ(ニ)」は、40「メンヨウ」、03「マイワク」とともに、coll(oquial)注記が施されていることが注目される。「メッタ(ニ)」「メンミツ」「メンダン」は『[布令／必用] 新撰字引』の解説文中にも、「千歳一時(センザイイチジ) メッタニナヒバヤヒ」(初編11ウ12行目)「巧遅(カウチ) メンミツデテマドル」(初編17オ 5行目)「面稟(メンリン) メンタン」(続編23オ 2行目)とみえている。また「メンボク」「メンダウ」「マイメイ」は『西国立志編』の「本文の左に付された振り仮名にみえる漢語」である。

このように、これまで採り上げられてきた幾つかの文献と、a～c群との重なり合いをみると、掲げた24語中13語すなわち「アイスル」「フシギ」「ホヨウ」「マイメイ」「マイワク」「メッタ(ニ)」「メンダウ」「メンダン」「メンボク」「メンミツ」「メンヨウ」「マイワク」「ヨケイ(ナ)」になんらかのかたちで重なり合いがみられるのであり、やはりこれらの漢語は「平易な漢語」であると言えよう。

ところで、前述したように、第40項目では見出し項目として「不測」が置かれながら、そこに

は「フシギ」と振仮名が施されていて、「フシギ」と「不測」との結びつきのつよさを予想させると同時に、「フシギ」が当期、漢語らしさをさほどみせない漢語となっていたことをも予想させる。これは前述の重なり合いの中でも「フシギ」は複数の文献にみられていることからも裏付けられよう。漢字列「不測」と漢語「フシギ」との結びつきは、非辞書体資料<sup>9</sup>にも見出すことができる。掲出にあたっては問題にしている箇所の振仮名のみを示し他は省いた。

- 1 ~聞て狸は感嘆し／現に親子の情義ほど世に不測なるものはあらじ (明治19年4月刊『[禽獸／世界] 狐の裁判』199頁9行目)
- 2 ~忽まち不測の禍害出来て乱暴／者の手込に出会ひ～ (明治20年4月刊『[政治／小説] 佳人之血涙』32頁8行目)
- 3 ~人もし切角の御神／託を聊かも疑ふものならば,』冥罰たちどころに到りて不測の災難を蒙るべしとの言葉に, ~ (明治24年3月『二人むく助』30頁1行目)
- 4 ~此方でもつて格別腹を立ねへたア不測／だねへ, ~ (明治24年9月刊『[獨逸／賢嬢] オチリヤ艸紙』56頁9行目)
- 5 ~是は不測だ是の手跡は若旦那の教師フローリスさんに其儘／ですと～ (同70頁9行目)
- 6 ~旁以て不測な／るは, 抑も彼の金をお前が何の原因にて, 四千フロレンス受け取つたか, ~ (同153頁2行目)

『必携熟字集』(明治12年5月)は〈△／符ヲ以テ俗語ヲ分〉(同集凡例)っているが、「メンモク」は〈面目 メンモク ホマレノコトヲイフ〉(卷下, 410ウ4行目)とあり, 俗語を表わす△が付されている。第39項目でとりあげられている「臭辱」は実は本書のハ部でもとりあげられており, そこには「ハジヲカク」(11ウ4行目)とある。つまりこの「ハジヲカク」と第39項目の「メンボクヲウシナフ」はほぼ同値のものとみなされていたと考えることができる。また「メンヨウ」「メンダウ」の2語について『[和漢／雅俗] いろは辞典』にあたると,

めんような[俗] (形) 奇怪, きたい, きめう

めんだう [俗] (形) 面倒, わづらはしき, 煩厭

とあり, (実は同辞典の〈凡例〉には謳われていないが) 俗語とみなされていると思われる。また青木輔清纂輯『雅俗節用集』(明治9年2月刊)<sup>10</sup>では〈氣象 コハログテ (左キシヤウ)〉, 〈戀慕 コヒシタフ (左レンボ)〉のように, 〈通例右ニ訓ヲ施ス者〉(例言)がある一方で, 〈音ヲ以テ唱ル語〉すなわち字音語として当該時期に流通していたと思われる語, については〈左ニ訓或ハ譯解ヲ附〉(同前)けており, そうしたかたちで明治期の日本語についての手がかりを得ることができそうに思われる。この『雅俗節用集』によって, a～c群に掲げた語にあたってみると, 「ヨケイ」「メツバウ」「メンミツ」「ブンリヤウ」「メイハク」「メイサイ」「メイゴン」「メイサツ」「メンダン」は右に音が附されており, 少なくもこれらの語は字音語として当該時期に使用されていたことがわかる。一方, 本書が〈漢語〉として掲げる語, 例えば「メイセキ (明晰)」「センケン (先見)」「モクゲキ (目撃)」「ケンチヨ (顯著)」「コト (糊塗)」「セイミツ (精密)」「チユウシ (注視)」

「ハクアイ（博愛）」「チウモク（注目）」「モクテキ（目的）」などは語そのものが収載されていない。したがって、やはり本書が〈漢語〉として置いている語と、〈国語〉として置かれた漢語との間には「差」がある可能性がたかい。

#### 4. 〈国語〉の位置付け

前掲したように本書は〈常ニ称フル国辞ノ義理ニ合ヘル、熟語ヲ求ルノ書〉がないので、〈日用語譚ノ際、或ハ手牘ヲ記ス〉際に、〈吾言フ所思フ所ノ、漢語ヲ〉〈国語ノ上ヨリ〉〈引ク〉ために編まれたことが〈凡例〉にはっきりと記されている。ここで述べられているのは、日常のはなしとば、かきことば双方にわたる言語生活において、本書のいう〈国語〉から〈漢語〉をひくということであって、それ以上のことは述べられていない。「俗語」という語はこの〈凡例〉の中にみられはするが、それは前掲したように、本書の体制には関わらない一文の中で使用されているにすぎない。日常のはなしとば、かきことばにわたる言語生活で使用される語がそのまますべて俗語とは通常は考え難い。しかし本書は次のように評価されている。

山田（1981：上巻372）は、本書を探り上げて「特に言語門は俗語から漢語を引く如く考案されてであること俗雅対照辞書（その江戸期に係るものに限定するならば、和語に関する詞葉新雅、漢語に関する文藻行潦・詞藻行潦、および雅俗幼学新書等がその例）の如くであり、他の漢語辞書と撰を異にする」と述べる<sup>11</sup>。また注2でふれた「第一・二部附表」中では、「俗語によるいろは順」、「俗語（譯語）から漢語を求めるようにしたのが特徴」（同：下巻1508）と述べられ、また「俗雅辞典」「に近いもの」（同：1746）と述べられており、いずれにしてもここでは本書の〈国語〉が「俗語」と見なされていると覚しい。山田（1981：上巻「例言」19-20）は「俗語」を「口頭語の最右翼。皆をミンナ、端をハジ、側をガワ、恰もをアダカモと言う如きを指す。日常会話において最も普通に、又寬いだ場面に用いられる所の者。方言の大部分は之に属し、之を用いる事自体何等咎めらるべき理由は存しない。但、改まった場合、又反省が強く加えられる場面では、それぞれ対応する伝統形ミナ・ハシ・カワ・アタカモに回帰されることが多く、又その中の或る者に関しては文章語に改める事が是（よし）とされる」と定義している。ここでは「俗語」は「口頭語」の一部を占めているとみなされていると思われる。とすれば、本書の〈国語〉すべてが「俗語」すなわち「口頭語の最右翼」とみることは妥当か。注7にひいた松井（1997）の「通常語」は前述した「日常のはなしとば、かきことば」に通うとみることができるが、本書の〈国語〉について概観を試みておくことにする。

これまで述べてきたように、本書以外の辞書体資料、例えば『必携熟字集』や『[和漢／雅俗]いろは辞典』において「俗語」と判断されている語が本書の〈国語〉に含まれていることは確認できている。また「メッタニ」（第32項目）「メンダウ」（第42項目）「メンボクナシ」（第38項目）「メクバセ」（第62項目）「メミエ」（第88項目）はこれらとほぼ重なる語形を『俗語雅調』（明治24年4月刊）の見出し、すなわち「俗語（サトビコトバ）」（同書凡例）として見出すことができる。また「メッチャ」（第30項目）「メッチヤクチャ」（第31項目）「メクジラ」（第58項目）「メゲル」（第71項目）などの語は（現代日本語を母語とする稿者の内省では）俗語にかたむくと感じ

られる。しかしながら一方で「メヅラシ」(第22項目)「メノマヘ」(第51項目)「メグラス」(第65項目)「メデタシ」(第73項目)「サイワイ」(第74項目)などはかきことばとしても使用される「伝統形」と思われ、これらをも俗語とみることは(俗語の定義に関わるとも言えるが、通常は)できないであろう。したがって、本書の〈国語〉に俗語(的表現)が少なからず含まれていることはもちろん認められるが、やはりそうしたものを含みながらも、全体としては(はなしことば、かきことば双方にわたって)日常使用される語が〈国語〉とみなされていると考え、「俗語」に限られているとまではみないのが穩当であろう。

## 5. おわりに

『[漢語／文章] 熟字早引』について本稿で確認できたと思われるところを整理しておく。まず本書は〈国語〉すなわち(本書が成った頃の)明治期にはなしことば、かきことば双方にわたって、日常使用されていた語、表現から〈漢語〉をひくための辞書として編まれたと(少なくもその形態などからは)思われる。この〈国語〉には漢語も含まれているが、〈国語〉として置かれている漢語は、〈漢語〉として置かれている漢語よりも日常的に使用されていたと予想できる。すなわちこの2種の漢語に着目することによって明治期の日本語における「漢語の層」を考える緒が得られると思われる。また〈国語〉が語をこえた言語単位である場合、見出し項目として置かれている〈漢語〉に、語を単位として1対1で対応する和語が存在しなかった可能性がある。

本稿では明治2年刊『漢語字類』、明治9年刊『雅俗節用集』、明治12年刊『必携熟字集』、明治22年刊『[和漢／雅俗] いろは辞典』など、幾つかの辞書体資料の「情報」を組み合わせて考察を試みた。一つ一つの辞書体資料についての充分な検討を加えることが今後の課題の一つ<sup>12</sup>であろうが、幾つかの辞書体資料を適切に併せ用いることができれば、当該時期の言語についてのより安定した観察が可能になると考える。

また本稿では漢字列「不測」と「フシギ」との関わりについて、非辞書体資料を併せたが、こうした「方法」もよりひろいみわたしの中で行なっていく必要があろう。例えば、漢字列の左右に振仮名を施している非辞書体資料の左振仮名なども手がかりになると思われる。『西国立志編』(明治4年刊)に次のような例を見出した。

- a 〈～耐久(左ヒルマヌ)ノ志堅忍(左シンボウ)ノ作業(左シワザ)信實ノ行(右ヲコナヒ)ヲ觀ルトキハ人々自己ノ體面(左メンボク)ヲ存スルノ力並ビニ自己(左ジブン)ニ依頼(左ヨリタノミ)スルコトノ力ハ～〉(第1編9ウ10行目)
- b 〈皆各々自己ノ體面(左メンボク)ヲ存シ職分ヲ盡クシ～〉(第8編15オ12行目)
- c 〈～盡トク自己ノ品行ヲ端クシ體面(左メンボク)ヲ存スルコトヲ得ベキナリ〉(第10編19オ5行目)
- d 〈～吾一家ノモノヲシテ體面(左ヒトガラヨキ)アル生涯ヲ做(右ナス)ニ至ラシメタルハ』～〉(第4編20オ12行目)。

ここでは漢字列「體面」の左振仮名に漢語「メンボク」があてられている。また一方では例 d のように〈ヒトガラヨキ〉という左振仮名もみられ、こうした振仮名がどのようにして施されたかという「具体的な過程」ではなく、結局今目にするようななかたちで、承認され残されたということに着目するならば、『西国立志編』成立時における言語の理解としては、漢語「メンボク」、「體面」と「ヒトガラヨキ」が意味の上で重なり合いをもち、(連想において)つながりをもっていたことがわかる。本書では第38, 39, 41の各項目の〈国語〉にこの「メンボク」が含まれているが、当該漢語は日本語の中で長く使用されてきており、富士谷御杖『詞葉新雅』においても「メンボク」「メンボクヲツケル」(84ウ)は〈里言〉として採られている。

ところで『西国立志編』すべてにあたっても、本書メ部として掲げた項目に関わる例を充分に得られるわけではまったくない。それは『西国立志編』が作品／テキストとしての纏まりをもつていて、その作品／テキストには何らかのテーマがあって、それにそってあらゆる文がそこに置かれている、ことからすれば当然のことといえよう。山を舞台とした物語に魚の名はあまりでてこない。非辞書体資料による言語観察はテキストであるところに「強味」があるが、こうした面もあり、この点では辞書体資料の「ひろがり」を評価することができる。山田(1981)は稿者の定義とは異なり、「文脈に即して要語・要句を註解する所の」「字類・字解・字引類」(小引3頁), 「本書所掲ノ順ニ語ヲ抽出シタモノ」(序説2頁)を非辞書体資料と位置付け、その上で「非辞書体は辞書体に勝る」(小引3頁)と述べる。そこに「文脈」はもたないけれども、もともとは具体的な「文脈」を有し、その「文脈に即して要語・要句を註解する所の非辞書体の字類・字解・字引類」は、その「具体性」故に、ある時期の語の意味にふかく分け入ろうとした時にきめこまかな手がかりを与えてくれる可能性を有していると思われ、稿者の言う「辞書体資料」と「非辞書体資料」とをつなぐものとして、山田(1981)の言う「非辞書体」すなわち「字類・字解・字引類」に注目する必要をつよく感じる。

### 注

- 1 本稿では直接の調査資料である『[漢語／文章] 熟字早引』からの引用には〈 〉を、他の引用には「 」を用いた。
- 2 本書は山田忠雄『近代国語辞書の歩み』下(1981年三省堂刊)「第一・二部附表」の「漢語辞書」で「語73」とされているもの。明治16(1883)年6月には編輯人を〈京都府士族／下村孝光〉、〈出版人〉を辻本信太郎とする改題本『普通漢語字類大全』(「語135」)が刊行されている。山田忠雄「附表」では刊行年月を明治9年5月とするが、本書見返しには〈明治九年／子四月新刻〉とあり、また原田道義の序には〈明治乙亥／六月下院〉すなわち明治8年6月とあるが、今は見返しにしたがって明治9年4月の刊行としておく。本稿では、国立国会図書館蔵『[漢語／文章] 熟字早引』を底本とした明治期漢語辞書大系第25巻所収の影印を使用し、あわせて稿者所持の改題本を使用した。尚、同辞書大系は本書所収頁すべて(331~481頁)の上部に「漢語文章大全漢語便解」という書名を掲げるが、これに関しては同大系別巻3の「解題補訂」中に「編集上のうっかりミスである」(79頁上段)と記されており、本書の別称ではないことがわかる。

- 3 〈熟字〉は言い換えれば「熟した（＝二字以上の）漢字列」ぐらいの概念で用いられていると思われ、言語単位としては語をこえるものも含まれている。本書には例えば〈得芳姿 オスガタヲハイス〉（ハ部11オ 7行目）、〈一朝傾敗 ニハカニツブレル〉（ニ部13ウ 8行目）などの見出し項目がみられる。ここでの「漢字列」は語を単位とすることも、そうでないこともあり、またその語が中国語からの借用語としての漢語である場合も、それを擬した語（擬製漢語、日本製漢語）である場合もある。
- 4 収載された見出し項目はイ237, ロ17, ハ164, ニ42, ホ57, ヘ71, ト153, チ87, リ66, ヌ23, ル8, ヲ366, ワ99, カ250, ョ132, タ226, レ29, ソ141, ツ135, ネ54, ナ165, ラ37, ム94, ウ153, ノ63, ク153, ヤ72, マ179, ケ93, フ234, コ276, テ187, ア300, サ225, キ318, ユ67, メ95, ミ218, シ460, エ47, ヒ272, モ199, セ106, ス155で、イロハ分けされた箇所で6525項目である。これは『漢語字類』の4340を上回っている。松井(1990)は「明治二年から六年にかけて刊行されたほとんどの漢語辞書の掲出語数が」「『漢語字類』の掲出語数、または、これに『新令字解』の掲出語数を加えた数とさほど違わないのは、『漢語字類』や『新令字解』の掲出語が後の漢語辞書に受け継がれているためである」(180頁)と指摘している。本書の6525項目が、『漢語字類』の掲出語数を上回り、さらにそれに『新令字解』の掲出語数である904語を加えた5244を上回っていること、また「苛刻」に関わって後に掲げたことからも推測できるが、「語釈」からみても、本書はおそらく『新令字解』、『漢語字類』の直接の影響下にはないと思われること、また本書が成ったのが明治9年であること、などを考え併せれば、本書を独立した存在として注視することに充分意義があると考える。
- 5 例えは『新令字解』を縹いても、そこには〈内地多難 日本ノ地ニヲヽキ／ナヤミアリト云コト〉（初編ナ之部10ウ 2行目）のような（四字）漢字列、さらには〈猶亦從前之功ヲ不沒 ナヲマタマエヨリノ手ガラヲムナシクナサノズトイフコト〉（同4行目）などの表現も見出し項目として採られている。また『漢語字類』も同様で、〈三十六策走為上策 ドウシアンシテモノニゲルガカチダ〉（2ウ 5行目）、〈九腸寸断 ハラワタガチギレル／ホドカナシビ〉（6オ 2行目）などがみられる。かきことばを視野に入れれば、こうした、語よりも大きな単位が見出し項目として取られるということは、当期の（広義の）漢語辞書にとってはむしろ当然のことともみえることともできる。
- 6 「メクジラ」から漢語「苛察」にいきあたるということは、逆にみれば「苛察」のいわば語釈として「メクジラ」が置かれ得ることでもある。本書の〈国語〉と〈漢語〉との対応には、例えは「メクバセ」 $\longleftrightarrow$ 「注視」（第62項目）、「メデシラス」 $\longleftrightarrow$ 「注目」（第77項目）のように、留意すべきものがある。例えは『和漢／雅俗』いろは辞典には〈ちうし [する] (他) 注視、めをつける、みつめる〉、〈ちうもく [する] 注目、めをつくる〉とあり、本書の「メクバセ」「メデシラス」はこれらとは異なる使い方が存したことを思わせる。
- 7 本書及びその改題本は、松井(1997)が「山田忠雄氏が附表に漢語辞書として掲げておられる辞書で、削除するのがよいと判断されるものに次の三点がある」と述べて掲げたものの2点にあたる。その理由として「通常語・和語から漢語を探す一種の用語辞書・作文辞書であって、漢語の意味を調べるために編集された辞書ではないので漢語辞書のリストから外すべきである」と述べられているが、〈国語〉から〈漢語〉を求める辞書でありながら、〈国語〉を見出し項目にはせず〈漢語〉をそこに置いたのは、（編集の方向性とは一致しなくとも、さまざまな理由から）やはり漢語辞書の体裁を探るという選択があったとは考えられないか。そのような体裁であったからこそ、『普通漢語字類大全』という改題が可能であったとも言えよう。

- 8 松井(1990:194)はさまざまな検討を加え、「『新撰字類』が『漢語字類』を承けていること」を指摘する。両者がそうした関係にあるということがさまざまな観点からの検討によって明らかにされていれば、両者が影響関係をもつということを前提にして、例えば漢語「皮相」について『漢語字類』が「ミカケバカリデヒトヲ ミタテル」(66ウ3行目)と語釈を施し、『新撰字類』が「みかけ」(112ウ7行目)とすることを「語釈の改変」(同:195)とみることができ。しかし、そうした手続きなしにこの項目のみを比べた場合、これを一方から一方への「改変」とみることはおそらくできない。したがって、一般論としていえば、つよい関係を(特に編成上)もたない複数の漢語辞書の関係を語釈の比較のみから測定する場合は慎重に行なう必要があると考える。
- 9 今野(2005:55)でも述べたが、「編集」すなわち何らかのかたちで情報の取捨選択が行なわれている文献を「辞書体資料」とよび、そうした「編集」が行なわれていない文献を、「辞書体資料」と対置させて「非辞書体資料」とよぶことにする。松井利彦は「文献の冒頭から最後までの難語・難字を順次に摘出し、それに読みと意味を付す」「漢語辞書」を「順次掲出辞書」(1997年大空社刊『明治期漢語辞書大系』別巻3所収「明治期漢語辞書の諸相」16頁)と呼ぶことを提倡し、「山田忠雄氏が『近代国語辞書の歩み 上』において「非辞書態辞書と呼んでおられる辞書に当たる(序説2ページ)。この命名は辞書態を基準としているので「順次掲出辞書」と呼ぶことにする。これらの独習用辞書の存在意義を認め、この類の辞書にも独自の分類名を与えるべきからである」(58頁)と述べる。引用文中には受けの括弧が付されていないが、「非辞書態辞書」の位置に付されるべきものとひとまずはみる。ところで序説2頁にみえるのは「非辞書体」というtermであって「非辞書態辞書」ではなく、この記述は正確ではない。「態」は措くとしても「非辞書体辞書」は自家撞着的な表現とみえる。山田忠雄は「辞書体」と「非辞書体」とを対置させており、「非辞書体」は辞書ではないとみていると思われる。
- 10 山田(1981)は「第一・二部附表」「節用集」において当該書に「節567a」の番号を付し、中扉の記載に基づいて刊行年月を明治9年4月とする。架蔵の2本はいずれも「明治九年二月九日版権免許」の刊記をもつ。
- 11 今、ここは本書と似よりの書として掲げられた4書をどのようにみるべきかを述べるところではないのでひとつひとつについては措くが、『詞葉新雅』を採り上げるならば、同書はその〈おほむね〉に〈~つねにいふ詞のいにしへはい／かにいひけむとしりかたき時はやかて此書をとり出／て里言の上のもしにつきて其部をもとむへし〉(凡例1ウ5~7行目)とあり、〈つねにいふ詞〉〈里言〉から〈古言〉を求めるという「方向性」が示され、かつ〈里言〉をまず片仮名で掲げ、それに平仮名書きした〈古言〉を対置させるという形式も徹底している。そして〈里言〉として掲げられた語、表現は口語性をつよく感じさせる。しかし本書の〈国語〉はそこまで口語に限定されていないと覚しく、こうした引き合いがふさわしいものであったか。
- 12 注2に引いた大系「解題」(土屋信一執筆)は、本書に関わる10行の「解説」中に山田(1981)を4行引用し、その上で「書誌的研究のみ先行し、所収漢語の研究は今後の課題である」と指摘している。

#### 参考文献

- 今野真二(2005)『文献から読み解く日本語の歴史 [鳥瞰虫瞰]』笠間書院  
 松井利彦(1990)『近代漢語辞書の成立と展開』笠間書院  
 松井利彦(1997)「近代漢語辞書の基準」『京都府立大学学術報告人文・社会』49, 1-60, 京都府立

大学

村山昌俊(2003)『明治時代語論考』おうふう

山田忠雄(1981)『近代国語辞書の歩み』三省堂

山田俊雄(1977)「漢語研究上の一問題－漢語層別化の試論－」松村明教授還暦記念会編『松村明教授還暦記念国語学と国語史』, 593-632, 明治書院

(投稿受理日：2006年6月1日)

(最終原稿受理日：2006年8月21日)

---

今野 真二 (こんの しんじ)

清泉女子大学

141-8642 東京都品川区東五反田3-16-21

skonno@seisen-u.ac.jp

## Relating to the *Jukuji Hayabiki*

KONNO Shinji  
Seisen University

### Keywords

*kangojisho, Jukuji Hayabiki, kokugo, kango, slang*

### Abstract

The pocket dictionary *Jukuji Hayabiki* was published in 1876. It has been indicated that most of the *kanji* (Chinese character) dictionaries published at the beginning of Meiji Era were strongly influenced by *Shinreijkai* and *Kangojirui*. However, it has been anticipated that this *Jukuji Hayabiki* was not influenced by the two books. Unlike the general *kangojisho*, *Jukuji Hayabiki* is not used to look up the meaning of the *kango* but it is edited to look up *kango* that corresponds to *kokugo* (the Japanese Language). *kokugo* actually includes Chinese characters. During this time, *kango* that has been treated as *kokugo* was thought to be *kango* that could be easily understood. Thus, this dictionary can be seen as a valid dictionary to observe the layers of *kango*.